
ジューン=ブライド

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ジューン＝ブライド

【Nコード】

N7770C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

そろそろ結婚適齢期の湯川先生。いつもいつも居酒屋で飲んだくれているが隣にいつもいる優しい顔の彼が。微妙な年齢の頃の女心を書いてみました。

第一章

ジューン

「ブライド

とある小学校。そこの子供達の言葉である。

「綺麗なんだけれどね」

「そうよね。美人よね」

誰かについての噂だ。しかしまだその誰かはわからない。

「けれどなあ」

すぐにこう突込みが入った。綺麗だの美人だのといった褒め言葉が打ち消されてしまった。

「あれじゃない？何か焦ってるっていうかさ」

「焦ってるって言うの？何か困ってるみたいな」

「そうそう、それぞれ」

彼等は口々に好き勝手だが意外と的を得ていることを言っているようだ。子供の言葉というのは実に素直で真実を語るものである。

「何に困ってるの？」

「あれだろ、やつぱり」

また言葉が交あわされる。子供達のうちの誰か一人が述べたのだ。

「結婚できないことが」

「あの先生独身だったんだ」

「馬鹿ね、それ言ったら大変よ」

すぐにそう突込みが入った。

「先生気にしてるんだから。もう二十八よ」

女性としてはかなりいい歳だ。複雑な年頃と言っても過言ではない。そろそろ結婚していたり子供がいたりする。三十という大きなターニングポイントも近付きそれも気になってくる。結婚していなかったり彼氏がいなくなるとかなり焦ってしまう。

「だからねえ」

「わかったよ。やばそうだし気をつけるよ」

「あの先生ヒステリックなところがあるしな」

そんな話が為されていた。その話の対象は湯川紗江子という。今噂話をしている子供達の学校の先生で実際に二十八歳、整っているがいささかワイルドな印象を与える気の強そうな顔の人で腰まで届くその黒く長い髪もそうした感じだ。整ってはいない切り方が印象的で豹か狼を思わせる。背は高くスタイルはかなりいい。タイトのミニモジーンズも実によく似合う。モデルとして通用しそうな程だ。しかし彼女には悩みがあった。二十八歳。その歳なのにまだ結婚していない。それどころか今は彼氏さえいないという困った状況なのである。

「困ってるのよ、本当に」

隣にいる後輩で同僚の秋月明に仕事の後の居酒屋で話をする。彼は男である。

「どうしたらいいのやら」

日本酒を片手に持った言葉である。顔を真っ赤にしてカウンタ―に昌代と並んで座っている。ピンクのシャツと赤いタイトのミニに素足といった格好が艶めかしい。美人なことは美人である。

「先輩彼氏いたんじゃ」

「別れたのよ」

その日本酒を一口飲んでから述べる。

「もうね」

「付き合って一ヶ月でしたっけ」

「そうよ」

無然として語る。

「詰まらないことで喧嘩しちゃって。それで終わりよ」

「喧嘩の原因は何ですか？」

「詰まらないことよ。私の仕事の」と

「先輩のですか」

「そうなの」

自分でコップに酒を注ぎ込みながら語る。彼女の側には一升瓶が置かれている。烏賊ゲソを焼いたものをつまみにしながら飲んでい

る。「仕事を辞めて一緒にならないかってね」

「いいんじゃないですか？」

「よくないわよ」

憮然としてそれを否定する。

「仕事を辞めたくないのよ。好きな仕事だから」

「先生の仕事ですか」

「ええ」

紗江子は生徒達からも父兄からも評判のいい先生である。明るくて面倒見がよく公平に接するからだ。簡単なようで意外と難しい。そうしたことができる先生なのだ。

その紗江子が今ふてくされ気味で飲んでいる。その理由は至つてありきたりというか何処にでもある話であるが今の彼女にとってはそうではなかった。かなり真剣な顔であった。

彼女は今とにかく不満であった。それがもとで別れることになったから当然と言えば当然であるがそれでもふてくされないわけにはいかなかったのである。

「仕事もそつちも両立させたいのよ」

彼女は言う。

「何があつてもね」

「そうなんですか」

「そうなの。確かに誰かに側にいて欲しいけれど」

一旦顔に憂いを浮かばせる。しかしそれは一瞬ですぐに元のふてくされた顔に戻る。その顔で言葉を続ける。止まらない感じになっていた。

「仕事もね」

「真面目なんですわ、先輩って」

「そつちでもないわ」

それは否定する。

「だって。やりたいことをやってるだけだから」

「そうなんですか」

「そうよ。私はしたいことをしてるだけ。それだけよ」

そう言うのだ。言いながらまた酒を飲む。もうかなり飲んでるがそれでも飲み続ける。真っ赤な顔と酔った目が艶やかであるが彼女は意識していない。

「けれどそれでもいいと思いますよ」

「いいの？」

「ええ。だってそれが他の人にも先輩にもいいことになってますから」

明はそう彼に述べてきた。彼は学校では優しくて大人しい先生として知られている。だから紗江子もこうして話をしているのである。所謂話し易い存在ということだ。

「いいと思いますよ」

「そうなの」

「そうですよ。だからこのままいけば」

「そう言うのなら」

彼女も悪い気はしない。むしろその気になってきた。それが彼女の気持ちいささか楽にさせた。楽になったところでまた一口飲む。それからまた述べた。

第二章

「頑張ってみるわ」

「そうですよ」

彼は答える。

「だから両立を目指せばいいと思ひます」

「そうね。じゃあ」

ここで顔を明るくさせてきた。

「実はまた声をかけられてるのよ」

「そうですか」

明はその言葉を聞いて一瞬顔を暗くさせて俯いた。しかしそれは一瞬のことなので紗江子は気付かなかつた。気付かないところに彼女の問題があつたがそれにも気付いていなかったのである。

「よかつたですね」

「ええ。ちよつと隠していたのは御免なさい」

「いえ、いいですよ」

それは笑つて受け止める。

「話しにくいこともあるでしょうし」

「秘密にするつもりはなかつたけれどね。ただ」

「それで今度はどうなんですか？」

明はそれを尋ねてきた。照れ臭そうな彼女が話し易くする為の配慮でもあつた。

「優しい人ですか？それとも」

「どうかしら。結構きつい人みたい」

視線を上にあげて考える顔で答える。顔は正面を向いていた。

「きついんですか」

「何となくだけれどね。どうかしら」

「とりあえず何回かお話されればいいですよ」

明はそう彼女にアドバイスをした。

「それから考えて」

「何かそれだとまだるっこしいわ」

しかし彼女はそれには首を傾げさせる。何処か少し焦っている感じもあつた。

「何かね」

「はあ」

「私だってもう二十八よ」

自分の歳を話に出してきた。

「もういい歳だし。焦りもするわよ」

「結婚ですか」

「ええ。彼氏が欲しいのは事実よ。けれどそれは」

今度は烏賊を食べた。その後でまた一口飲む。よく見ればかなり飲み食いしている。

「結婚を前提としてなのよ」

「それだと余計に焦っては駄目なんじゃ？」

「それもわかってるわよ」

紗江子も馬鹿ではない。そうしたことを全てわかっているのだ。

わかっているがそれでも自分で自分をどうにかできないことがあるのだ。それが今であつた。

「けれどね」

困った顔で述べる。

「つつい焦ってしまうのよ」

「そうなんですか」

「そういうこと。焦って余計に駄目になりかねないのもわかっているけれど」

「けれど先輩」

明はまた彼に声をかけてきた。

「焦る必要はないですよ」

「そう言うけれどね、あんた」

しかし紗江子はそれでも言う。目が少し座ってきて危ない感じに

なつてきていた。

「女の二十八つて微妙なのよ。だから」

「わかつてますよ。けれど時には周りを見ることもね」

「周りを」

その言葉を聞いて少し心が静まった。そのうえでまた話を聞くのだった。

「そうですね。時には立ち止まってね。子供達にもよく言いますけれど」

「子供達にもね」

熱心な教師でもある紗江子には響く言葉だった。その言葉を聞いてさらに冷静になり明の話より真剣に聞くのであった。

「そうしたら気付くものもありますよ」

「今の私もそうだったことね」

「はい」

そこまで語ったうえでにこりと笑ってきた。

「そうですね。わかりでしょうか」

「いえ、あまり」

しかしこう返した。

「頭ではわかつていてもね。心は無理よ」

「心ではですか」

「どうしても焦っちゃって。止まらないから」

また困った顔になる。とにかく焦って仕方がないのだ。

「本当に」

「じゃあ最後に一つ言葉を」

「何かしら」

明は話を打ち切ることにしたのかこう述べてきた。紗江子もその言葉を聞くのであった。

「幸せてやつは意外と気紛れでして」

「ええ」

「すぐ側にいるかも知れませんか」

「すぐ側に」

「はい」

ここでにこりと笑ってみせる。その笑みは紗江子に向けられたものであるが彼女はそのことには気付いてはいなかった。

「この言葉はお忘れなく」

「わからないけれどわかったわ」

彼女はその言葉に頷いた。とりあえずその場は終わった。暫くして彼女は彼の氏と付き合いをはじめた。それから彼女は等分の間は上機嫌だった。幸せな気持ちで日々を過ごし学校でもそれは同じだった。

第三章

「最近機嫌がいいですね」

「わかるかしら」

学校が終わって帰り道。紗江子は隣にいる明に上機嫌で顔を向けていた。にこにここと笑って実に楽しそうだ。表情だけでなく顔色もいい。かなり楽しげなのがよくわかる。

「だってね。今」

「この前お話してくれた彼氏ですね」

「ええ」

にこりと笑ってその問いに頷く。

「そうよ。実はね」

「仲いいみたいです」

「そうなの。本当にいい雰囲気」
にこりとした笑いがさらににこにこしたものになった。その笑みで笑って言葉が続けるのだった。その様子から紗江子の上機嫌があらためてわかる。

「何か凄く楽しい気持ちなのよ」

「よかったですね」

「ええ。このままいけそう」

上機嫌で答える。

「結婚までね」

「結婚、ですか」

明はその言葉を聞いて少し俯いた。しかしすぐに顔を戻してそれを隠すようにしたのだった。まるで紗江子に自分の素顔を見せまいとしているかのようにだ。

「そうなの。話はこれからだけれどね」

「まあそうですよね」

明もその言葉に頷く。まだ知り合っただばかりでそれはない。むし

るいきなり言われる方がおかしい。結婚詐欺かと思われて仕方がないだろう。

紗江子は上機嫌で明は俯き気味だった。明はそれがわかっているが紗江子はわかってはいない。その差があったが紗江子はあくまでにこやかに話を続けるだけだった。

「やっぱり」

「これからよ」

明るい笑顔で言う。

「これから。いい感じになるわ」

「そうですね」

明はその言葉に感情を殺して頷く。

「これからゆっくりと」

「ゆっくりっていうのはちょっとね」

紗江子はその言葉には否定的だった。それを顔にも浮かべてきた。

「何か」

「あれよ。やっぱり私はね」

少し苦笑いになった。その顔で述べる。

「もう二十八だし。その」

「焦りは禁物、ですよ」

「それはわかってるわ」

一応はこう言う。言うてからまた言葉を続ける。

「わかってるけれど」

「どうしてもなんですよ」

「そうなのよ。どうしてもね」

そう述べる。焦りは禁物だとわかっているもどうしてもだった。自分でも抑えようとするがそれが厄介だった。厄介は承知で気はやるのである。

「その、ね」

「案外そうでもないかもですよ」

「そうでもないって」

「この言葉も信じられない。やはり周りが見えないのだ。」

「また言っけれど。どうしてよ」

「どうしてもこうしても。ですから」

「何かわからないわね」

首を傾げての言葉だった。

「まあいいわ。とにかく今日もね」

「デートですね」

「そうなのよ。これからレストランで楽しく」

「いいですね、そういうの」

明はまた寂しい顔になる。しかしそれでもすぐにその顔を消して言葉を続ける。

「それじゃあ今日はこれで」

「悪いわね」

「いえ、別に悪くはないです」

明はその言葉にはこう返す。

「楽しまればいいですよ」

「わかったわ。それじゃあね」

「はい」

二人は別れた。上機嫌な紗江子に対して明は頂垂れていたがそれはどうしようもなかった。しかし紗江子はそれには気付かない。暫くの間彼女は楽しい日々を過ごしていた。だがそれが次第に怪しくなってきたのだ。

「怪しい、ですか」

「そうなのよ」

この日は明と一緒に居酒屋にいた。そこで飲みながら話をしていった。

「今は勘の段階だけけれど」

「どんな感じなんですか？」

「一言で言つとあれなのよ」

紗江子はそれに応えて言う。その手にはビールがある。今日はビ

ールを飲んでいた。

「私の他にも付き合ってるのがいるんじゃないかって」

「そうなんですか」

「ええ。気のせいだといいいけれど」

「じゃああれですよ」

明はここで言ってきた。

「少しヤマかけて」

「ヤマ、ね」

「はい。やってみたらどうでしょうか」

そう紗江子に提案してみる。彼にしては捨てるはおけない話だった。だからさりげなくだがこう提案してきたのである。

「それで」

「そうね」

紗江子もその言葉に頷いてきた。

「それじゃあ」

「はい、そうすると思います」

彼は言う。こうして紗江子は今の彼氏をさりげなくだが調べることになった。その結果はこれまた実に奇妙なことであった。

話をしてから数日後。二人はまた居酒屋で話をしていった。紗江子は今度はかなりふてくされた顔になっていた。その顔で酒を飲んでいる。

第四章

その酒が問題であった。何とウイスキーをストレートでどんどん飲んでいる。まるで無理にでも酔おうとしている感じである。そのことが飲んでいる態度からもわかる。

「で、どうだったんですか」

「最悪よ」

紗江子はウイスキーをあおりながら答えてきた。

「最悪ですか」

「そうよ。いたわ」

無然とした顔で言う。

「いたんですか」

「そうよ、しかもね」

顔は無然としたままだ。話はさらにとんでもないものになるのだ。つた。

「相手が問題なのよ」

「相手がですか」

「そうよ。誰だと思っ?」

「そうですね」

彼はサワーを普通に飲んでいて。強い酒を飲まずに普通に酒を飲んでいて。それを見ていると彼が聞き役に回っているのがよくわかる。

「タチの悪いホステスとか裏にヤクザ屋さんがある女の人とかでしようか」

「そんなのだっいたらいいわよ」

相変わらず無然として言う。

「といたしますと」

「世の中広いわよ」

急にこう言ってきた。いきなりこんな言葉が出て明は少し戸惑い

を覚えていた。

「何だと思う！？付き合ってた相手は」

「そんなのだったらいいんですよね」

「ええ」

そう返してきた。

「わからないわよね、普通は」

「ええと」

その言葉に首を傾げさせる。何かかなりやばそうなものを感じだしていた。

「未成年とか北朝鮮の職員とか」

「それも充分過ぎる程危ないけれどね」

特に後者は洒落にならない。実際に自衛隊の基地のある街でそんな話が結構あったりする。店にいた女が実は、という話なのである。

「とりあえず調べてみないとね」

「そうですね。協力しましょうか？」

「ああ、それはいいわ」

紗江子はそれは断った。

「自分でするから」

「そうですね。それじゃあ」

「ええ、それにしても」

紗江子はあらためて考える顔になった。冷静だったがそれでも覚悟というものは必要だった。それを意識するとどうにも怖いものも感じたのだ。

「鬼が出るか蛇が出るかですね」

「本当に職員が出たらどうしますか？」

明のこの言葉は冗談である。だが紗江子はそれに答えてきた。

「警察ね」

冗談だが真顔で答える。

「通報しないと洒落にならないわよね」

「そうですね。結構側にいるみたいですからね」

自衛隊の街ではそうかも知れない。冗談では済まされない話である。

「やっぱり」

「そちらは。まあ慎重に行かれることですね」

「承知しているわ」

こうして紗江子は今の彼氏についてさりげなく調べることにした。残念ながらその結果は彼女にとってあまりいいものではなかった。

それがわかってからのことだった。また明と居酒屋で話をしていた。実はこの居酒屋は二人の話をする場所でもあるのだ。この日もそうだった。

「それでどうでした？」

この日の明が飲んでいるのは白ワインだった。それを飲みながら刺身に天麩羅を楽しんでいる。和食と白ワインも案外合うものなのだ。

「結果は」

「聞きたい？」

紗江子はウオッカをストレートで飲んでいた。食べるものは一応はサイコロステーキがあるが碌に食わずにウオッカばかり飲んでいたのであった。

「結果」

「勿論です」

刺身を醤油につけて口の中に入れてながら応える。ハマチの刺身である。

「その為にごくにいますし」

「わかったわ。それじゃあ言うわね」

「はい」

「いたわ」

紗江子は懽然として言ってきた。

「そうですか」

「しかもね」

無然とした顔で言葉を続ける。

「その浮気相手何だったと思う？」

「ヤクザ屋さんの情婦とか本当に工員だったとか」

「そんな甘いものじゃなかったわ」

「こつも言う。明はそれを聞いて話が洒落にならない方向に進んでいるのを感じた。聞かずにはいられない。実際に話を聞いた。

「付き合う相手ってあれよ」

紗江子はウオツカをまた口に入れてから言う。

「女ばかりとは限らないのよ」

「女ばかりって」

「何だと思う？」

「ええと」

明は最初何のことかわからなかった。だが少し考えてから答えるのだった。

「若しかして、ですけど」

「とんでもない結論が出て来た。強張った顔で述べる。

「男とか」

「凶星よ」

不機嫌さを二乗させてさらに苦虫を噛み潰した顔になって言った。

「両刀使いだっただの」

「はあ」

これは想定していなかった。だがあると言えばあるのだ。それを今わかった。聞いている話何か嘘のようにさえ思える。というよりは嘘だと思いたかった。

「よりよってね。高校生の男の子と付き合ってたの」

「高校生とですか」

「かなり可愛い子だったけれどね。けれども男よ」

「そうだったんですか」

「言ったのよ、そいつ」

無然とした顔で述べる。

ジューン＝ブライド

「女は君だけだって。よりによってもね」

「それでどうしました？」

明は紗江子に問うた。問わずにはいられなかった。

第五章

「別れたんですよね」

「当たり前でしょ」

即答してきた。これは想定できた。

「『女』は君だけだって言われたけれどね。ひっぱたいてやったわ」
「女は、ですか」

「男と付き合うのは止めるつもりないみたいだしね。ふざけてるわよ」

そう言っただけでまたウォッカを飲む。次から次にあおっている。心から憤っているのがそれからもわかる。実際に彼女は憤っていた。それもすぐにわかることだった。

「全くね」

「何か凄い話ですね」

「そうでしょ。信じられないわよ」

ウォッカを飲む手が止まらない。しかしここで明がそれを止めてさせた。さしてきた。

「それで先輩」

「何？」

明の声に顔を向けてきた。身体も向きかけるがここで脚も目に入った。黒いタイトのミニから見える素脚も赤く染まっていた。酔っているというレベルではなかった。

「今相手誰もいないんですよね」

「ええ」

その言葉にこくりと頷く。

「別れたばかりよ。それが何？」

「じゃあ付き合ったらどうでしょう。いえ」

言葉の調子を変えてきた。じつと彼女の顔を見詰めてきたのだ。
「結婚なんかは」

「相手がいればね」

ふてくされた顔で返す。

「いないけど」

「いますよ」

しかし彼はこう言ってきた。

「ちゃんと」

「いたら紹介してくれるかしら」

まさかいないだろうと思っていた。酔っていても一応考えるだけのものは残っていたのでそう楽天的に考えていたのだ。ところがそうではなかったのだ。

「いいんですね」

「ええ」

明の言葉にこくりと頷く。

「それで誰なの？」

「はい」

ここでグラスを差し出してきた。

「えっ!？」

「僕でよかったら」

グラスを差し出したままにこりと笑ってきた。

「どうでしょうか」

「あの、まさかと思うけれど」

紗江子は戸惑いながら彼に対して言う。

「貴方が？」

「駄目ですか？」

そう紗江子に問う。顔が強張っていた。

「いえ、別に」

だが紗江子はそれを拒みはしなかった。こう返してきた。

「好きなのよね、私のこと」

「はい」

紗江子の問いにこくりと頷く。

「そうです。ですから」

「わかったわ。けれどね」

ただし言うことは言うのだった。後で問題のないようにだ。

「別にあれよ。振られたから付き合っくんじゃなくて」

「わかってます。じゃあ」

「ええ、そういうことね」

「お願いします。じゃあお付き合いのはじまりに」

「乾杯ね」

紗江子はにこりと笑みを返してきた。

「ええ、それじゃあ」

「お願いね。これから」

「ええ」

杯を合わせた。こうして二人の交際がはじまった。それが冬のこ
とで六月になった。六月になると紗江子は幸せになっていたのだっ
た。

「何かあつという間だったわね」

結婚式場だった。白いウェディングドレスに身を包み自分の控え
室にいる紗江子がこれまでのことを振り返っていた。今までとは全
然違う顔になっていた。

奇麗に化粧され顔は晴れやかであった。その顔で言っていたのだ。

「ここまでは」

「そうですね」

そこには明もいた。白いタキシードを着てにこにここと笑っていた。

「まさかこうなるとは思いませんでした」

「結婚までは？」

「流石に。そこまでは」

はにかんだ笑みで述べてきた。

「考えていませんでした」

「それも縁ね」

紗江子はにこりと笑って言葉を返すのだった。

「こつなるのも」

「そうですよね。まさか先輩と」

「ちよっと」

明に声をかけてきた。

「はい、何か」

「もう先輩じゃないでしょ」

紗江子にはこりと笑って声をかけてきた。その顔で明の顔を見ていた。

「籍も入れたんだし」

「そうですね。それじゃあ」

「名前で呼んでいいから」

こつ言ってきた。

「紗江子ってね。結婚するんだから」

「紗江子ですか」

「駄目？」

「いや、何か言いにくいなって思って」

はにかんだ笑顔のまま述べる。

「そついうのって」

「そつなの」

「呼び捨てじゃあれですよ」

明は言う。

「何か言いにくいから。だからそれは」

「何て言うの？」

「紗江子さんでいいですか？」

こつ提案してきた。はにかんだままだったが述べてきたのだ。

「それで」

「ええ、いいわ」

紗江子にはこりと笑ってそれに頷いた。今までの酒で荒れた顔もふてくされた顔もそこにはなかった幸せの笑顔だけがそこにあった。「それでね」

「はい、お願いします」

明はそのにこりとした笑みで応える。それからまた言った。

「これからも」

「こちらもね」

紗江子もにこりと笑って言葉を返す。何はともあれ彼女は念願の幸せを手に入れることができたのであった。

ジューン＝ブライド

完

2007・4・1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7770c/>

ジューン=ブライド

2009年6月23日10時34分発行